

中国語母語話者を対象としたカタカナ語の 聞き取りテストとカタカナに対する意識

山下 直子 ・ 畑 ゆかり* ・ 轟木 靖子
(国際理解教育) (穴吹ビジネスカレッジ) (国際理解教育)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

*760-0020 高松市錦町1-7-5 穴吹ビジネスカレッジ日本語学科

Katakana-words-listening Test and Learners' Attitudes : A Case Study of Chinese-speaking Learners

Naoko Yamashita, Yukari Hata* and Yasuko Todoroki

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

**Japanese courses, Anabuki Business College, 1-7-5 Nishiki-machi, Takamatsu 760-0020*

要 旨 外来語などのカタカナは、日本語学習者にとって学習が難しいものの一つであるが、カタカナ語に関連する研究は多いとはいえ、現場でも十分な指導がされているとはいえない。そこで、本研究ではカタカナ語彙の効果的な指導を探るため、中国語母語話者を対象として聞き取りにおけるカタカナ語の表記と意味の理解を調査し、困難点を分析した。さらに、カタカナ語に対する意識調査を行い、聞き取りテストの結果との関連を考察した。

キーワード カタカナ語 聞き取り 表記 意味の理解 意識調査

1. はじめに

外来語などのカタカナ語（カタカナで表記される語）は、日本語学習者にとって学習が難しいものの一つであり、カタカナ語彙教育が必要であることが先行研究において指摘されている。しかし、漢字学習等に比べてカタカナ語に関連する研究は多いとはいえ、陣内（2008）は「カタカナ教育の議論がまだ初期の段階」であるとする。実際に日本語教育の現場でも十分な指導がされているとはいえないようである。中山他（2008）は、カタカナ語に学習者は苦手意識を持ち教育を必要としているが、他の文字

や語彙と同等には扱われておらず「教師の意識改革及び教材や教授法の開発が急がれよう」としている。

カタカナ語の使用が増加する中で、日本語学習者もカタカナ語を避けることはできず、効果的な学習を支援するための指導法や教材の開発は急務であるといえよう。特に、外国人留学生にとっては、山下・品川（2009）が、講義理解において専門用語やカタカナ語が問題となると指摘しているように、カタカナ語の学習は重要である。今後、カタカナ語について調査研究を行い、実証的な検証を積み重ねることが重要であると考えられる。

そこで、本研究では、効果的なカタカナ語彙の指導を探るため、カタカナ語の聞き取りにおける表記と意味の理解を調査し困難点を分析した。さらに、意識調査を行い、学習者のカタカナ語に対する意識や背景と聞き取りテストの結果との関連を探った。

2. 先行研究

石綿(2001)は、外来語は日本語化し変容するにつれて、「発音、文法、意味」などさまざまな面で原語とずれを生じていると指摘する。そのためカタカナ語の学習にはさまざまな困難点が予想される。表記に関しては、中東(1998)が韓国語母語話者とブラジル・ポルトガル語話者を対象とし、英語を与えて外来語を書く調査を行い、学習者の外来語表記には母語の影響が著しいことを明らかにしている。恩塚(2004)では、日本語の和語や漢語にはない音節を表記するところにカタカナの難しさがあると指摘し、従来の50音図に外来語音を足した「カタカナ表記表」の重要性を述べている。上野山(2010)は質問紙調査の結果から、英語圏の学習者は、外来語の語源・語形が習得に影響を与えているが、接触する頻度が高い語はそれらに関係なく習得されやすいとしている。

カタカナ語の成り立ちや習得上の問題に加え、心理的な要因も影響を与えていると考えられる。武田(2002)はアンケート調査から、留学生のカタカナに対する苦手意識は、「膨大な数に加えて『本当の言葉』ではない」という意識が強いためではないか」としている。堀切(2008)は、英語を母語とする日本語学習者に質問紙調査を行った結果、外来語に対する苦手意識は特有のものであり、外来語の聞き取りに対して習得困難を感じ、使用に抵抗を強く感じるほど、外来語を拒絶する態度になりやすいことを明らかにしている。

このカタカナ語を聞くことに着目して、畑・山下(2010)では、カタカナ語の聞きとり調査を行い、得られた誤用を分析した結果、韓国語母語話者は長音の誤りが6割を超える一方、中

国語母語話者は長音の誤りが最も多いものの、濁音・半濁音の誤りも多いという違いがみられ、母語の影響を検討する必要があるとしている。畑・山下(2011)では、韓国語母語話者に対して長音を中心としたカタカナ語の指導を行い、指導の効果を検証しているが、韓国語外来語とのずれも難しさにつながることを指摘している。しかし、畑・山下(2010)等で行ったカタカナ語を聞いて書く調査では、音の聞き取りからカタカナでの表記までの過程の、どこで誤りが生じたのかを特定することは難しいという課題が残された。そこで、本研究では、語彙知識の語形と意味に焦点をあて、カタカナ語を聞いて書くことに加え、語の意味も母語あるいは原語である英語で書かせた。語彙知識に関しては、Nation(2001)が「形」「意味」「使用」の3つの側面から分類し、「意味」の下位分類として「語形と意味」をおいている。産出的知識として、正しい表記を書けるかどうかをみると同時に、受容的知識として意味の理解についても分析を行うため、意味についても回答をさせた。

また、陣内(2008)は、カタカナ語の習得に困難さを感じるのは母語によって異なり、韓国語母語話者と比較して中国語母語話者の困難度が高いとしている。その要因としてカタカナ語と中国語に「相当の距離」がありなじみがないことをあげている。意識においても母語の影響が予想されるため、本研究では中国語母語話者のデータを対象として分析を行う。

本研究の研究目的は、カタカナ語彙の効果的な指導を探るため、カタカナ語の聞き取りにおける表記と意味の理解を調査し困難点を分析することである。さらに、意識調査を行い、学習者のカタカナ語に対する意識や背景と聞き取りテストの結果との関連を探った。

3. 研究方法

3.1 調査対象者

調査対象者は日本国内の大学と日本語学校に在籍している日本語学習者44名(男性22名、女性22名)である。母語は中国語であり(台湾

表1 分類基準

	基準	誤用例 (正答)		基準	誤用例 (正答)
1	長音欠落	コーヒ (コーヒー)	9	(半)濁音欠落	ホケット (ポケット)
2	長音挿入	ポケットー (ポケット)	10	(半)濁音挿入	メードル (メートル)
3	促音欠落	スリバ (スリッパ)	11	母音変化	スポー (スプーン)
4	促音挿入	シャッツ (シャツ)	12	子音変化	ストーグ (ストーブ)
5	拗音欠落	ニース (ニュース)	13	表記	シャワー (シャワー)
6	拗音挿入	ティーブル (テーブル)	14	欠落・空欄	
7	撥音欠落	スプー (スプーン)	15	その他	
8	撥音挿入	プログランム (プログラム)			

を含む)、日本語は中・上級レベル(日本語能力試験N2レベル修了程度もしくは、それ以上)である。日本語の総学習期間は1年以上2年未満の学習者が14名、2年以上3年未満が20名、3年以上4年未満が6名、4年以上5年未満が2名、5年以上が2名である。

3.2 調査方法

本研究では、聞き取りテストとカタカナ語に対する意識調査を行った。聞き取りテストでは、カタカナ語を2回ずつ読みあげたCDを聞いてシートに書かせ、その意味も母語である中国語あるいは英語で答えさせた。

テストに用いた語彙は、畑・山下(2011)等の結果をもとに精選した次のカタカナ語25語である。インターネット、カレー、カレンダー、ギター、グレー、コード、コーヒー、シャツ、シャワー、ジョギング、スピード、スプーン、ズボン、スリッパ、デザート、テーブル、ドライブ、ニュース、パーティー、ファッション、フォーク、プログラム、ポケット、メッセージ、ユニフォーム。

また、カタカナ語に対する意識調査は中山他(2008)を参考に中国語で作成した。質問項目は、カタカナ語の難しさ、カタカナ語の使用、カタカナ語の学習や学習に対する要望などについて尋ねたものである。

3.3 分析方法

学習者にカタカナ語を聞いて答えさせた表記と意味のデータから誤答を採取した。表記につ

いては、一つの語の中に複数の誤用が現れた場合、それぞれを一つの誤用とした。次に、これらの誤用を表1に示したような15の基準に分類し集計した。分類基準は、必要な長音等が欠落したものや必要ない箇所に余分に挿入されたもの、母音や子音の誤り、平仮名を使うなどの表記上の間違い、一部の文字の欠落や空欄とそれらの基準にあてはまらないその他である^{注1}。

また、誤用が語頭、語中、語末のどの位置に現れるかによっても分類、集計した。ここでいう語頭とは第一拍の音節を指す。長音は、第一拍にある短母音が長音化した場合は、誤用が生じた位置が第一拍であることから語頭の誤用と分類する。例：ズーボン(ズボン)

4. 結果と考察

4.1 聞き取りテストでの表記の誤用

聞き取りテストの結果、表記に関しては正答率65.2%、全誤用数は627である。3.3の基準によって表記の誤用を分類した結果を図1に

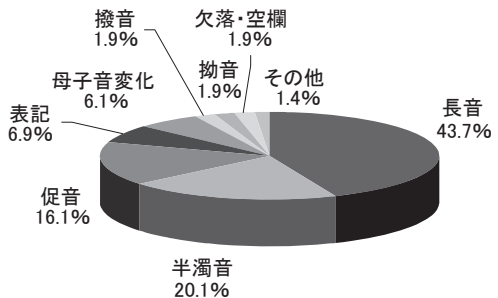


図1 表記の誤用数

示す。長音に関する誤りが274と最も多く全体の43.7%を占め、次いで、濁音・半濁音126 (20.1%)、促音101 (16.1%)、表記43 (6.9%)、母音・子音の変化38 (6.1%)、撥音12 (1.9%)、拗音12 (1.9%)、欠落・空欄12 (1.9%)である。それぞれ欠落、挿入等に分けてみると、長音の欠落が最も多く148 (23.6%)、次いで、長音の挿入126 (20.1%)、濁音・半濁音の欠落85 (13.6%)、促音の欠落56 (8.9%)、促音の挿入45 (7.2%)、濁音・半濁音の挿入41 (6.5%)である。以上の結果から、長音や促音などの特殊拍と濁音・半濁音に関する誤用が多いことが明らかになった。

誤用の具体例をみると、ユニフォームの20パターンなど、さまざまな誤用にわかれる語もあったが、多くの語で共通する特徴として、長音の欠落「カレンダー」(9例)、長音の挿入「シャーワー(4)」、「ギター(4)」、「ギッタ(6)」など促音の挿入といった特殊拍に関するものと、「カレンダー(7)」などの濁音の欠落などがあげられる。

長音の欠落は全体の誤用で最も割合が高く、長音のある位置別に誤用数と欠落率(あるべき長音が欠落した割合)をみると、語頭15 (5.7%)、語中76 (28.8%)、語末57 (18.5%)と位置により違いがみられた。さらに、長音位置とアクセント型の組み合わせによる欠落の誤用数と欠落率を表2に示す。語中の低低37 (42.0%)、語末の低低51 (58.0%)と低低のアクセントで欠落が多い。長音の知覚に関する先行研究ではアクセント型の影響が指摘されているが(皆川他2002, 小熊2008)、カタカナの聞き取りにおいても、低低のアクセントでの長音が難しいことがわかる。

長音の誤用には、単純な欠落や挿入だけでなく、「シャーワ(8例)」、「スーブン(8)」な

表2 位置とアクセント型による長音欠落数・率

語頭		語中			語末		
低高	高低	高高	高低	低低	高低	低低	高高
9	8	14	24	37	4	51	0
10.2%	4.5%	15.9%	27.3%	42.0%	4.5%	58.0%	0.0%

ど長音記号が前後にずれる誤用、「メッセージ(5)」など長音と促音の交替や長音が入るべきところに促音が入った誤用もあった。いずれも拍は把握できているが、長音のずれの場合は、語のどこに長音が置かれているかが正しく把握できていない。長音と他の特殊拍の交替は、直音とは異なる特別な音があることには気づいているが特殊拍の中での混同が起こっている。「メッセージ」「カレンダー」のように一語に長音と同時に促音や撥音などの複数の特殊拍を含む場合も誤用が多くみられた。

促音については、必要な促音が欠落する誤用と余分な促音が挿入される誤用数は、54と48とほぼ同数であった。位置別にみると、欠落・挿入ともに語頭での誤用が多い。欠落率は語頭39.8% (35)、語中15.9% (21)と「メッセージ」のような語頭の促音のほうが落ちやすい。挿入も、「ギター」のような語頭に余分な促音が挿入される誤用が35と促音挿入の誤用全体の77.8%を占める。促音の誤用は日本語には中国語のような有気・無気音の区別がないことに起因しているのであろう。呼気の出方によって語中の無声子音が有気音ととらえ、促音があるように聞いていると考えられる。特に語頭の部分での聞き取りが難しいといえる。

日本語学習者の特殊拍には問題があることが指摘されており、習得が困難であると指摘されているが(戸田2003他)、以上のように、カタカナ語においても特殊拍の聞き取りが難しいという結果がみられた。

次に、濁音・半濁音の誤用について述べる。濁音・半濁音の誤用数は、長音の誤用に次いで129と誤用全体の2割を占めた。この誤用は、従来言われているように、日本語にある有声音・無声音の区別が中国語ではないことに起因するのである。誤用数は欠落85 (13.6%)と挿入41 (6.5%)では欠落が多い。位置別にみると、有声音を無声音で表記した欠落率は語頭では4.5% (18)にとどまり、語中・語末は、ほぼ同じ割合で、それぞれ10.1% (31) 11.7% (36)であった。挿入の誤用数は、語頭4、語中25、語末12で語中が6割を超えた。欠落・挿

入とともに、語中・語末に比べて語頭部分での聞き取りは正答率が高い。

この誤用でも、清音が濁音・半濁音になる挿入や濁音・半濁音が清音になる欠落のほかに、「スピード」が「スピード」(13例)、「ズボン」が「ズボン」(5例)など、半濁音が濁音に、あるいは濁音が半濁音になる濁音と半濁音の交替が23例みられ、濁音・半濁音の誤用の36.5%を占めた。交替はいずれも語中で起こっており、語中では挿入の92.0%、欠落の74.2%を占め誤用のほとんどが交替である。語中にあるハ行の半濁音や濁音の聞き取りが特に難しいことが明らかになった。

4.2 表記と意味の結果の比較

聞き取りテストでの表記と意味の結果を比較すると、正答率は表記が65.2%、意味が79.8%である。全体的に意味の理解度は表記の正確さより高く、意味は分かるが正確に書けないということが明らかになった。多くの語が音を聞いて意味を理解する受容的な知識のある受容語彙ではあっても、意味を正しく表記することができる産出語彙としては定着していないといえよう。

図2に語別の聞き取りのテストの誤答率を示す。「ユニフォーム」のように、表記65.1%と意味81.4%と、ともに誤答率の高い語や、「コーヒー」(7.0%、0%)や「ニュース」(7.0%、2.3%)のように誤答率の低い語もある

が、多くの語は表記と意味にずれがみられた。誤答率が1割以下の語は、表記は3語、カレー(2.3%) ニュース・コーヒー(7.0%)である。意味は12語で、コーヒー・スピード(0.0%)、インターネット・ニュース(2.3%)、シャワー・ズボン(4.7%)、テーブル・パーティー(7.0%)、カレー・カレンダー・シャツ・デザート(9.3%)である。

一方、誤答率が5割以上の語は、表記は6語で、カレンダー(69.8%)、ユニフォーム(65.1%)、スプーン(60.5%)、シャワー・ギター・メッセージ(53.5%)。誤用数でみると、ユニフォーム68、メッセージ59、スプーン48、カレンダー45、スピード42である。意味で誤答率が5割以上の語は4語で、ユニフォーム(81.4%)、コード(79.1%)、グレー(58.1%)、ドライブ(51.2%)である。これらの語の誤用の具体例は、コードはコート(coat)、ドライブはトラブル(trouble)、グレーはグレープ(grape)などがあげられる。

このような表記と意味の理解のずれは、語の抽象性やなじみの程度によっておこっていると思われる。表記・意味ともに正答率の高い「カレー」「コーヒー」などは、学習者の身近にありなじみがあり、具体的なもので視覚的に示しやすい語である。一方、表記・意味とも正答率の低い「ユニフォーム」は語に対するなじみがないものである。上野山(2010)は、英語圏の学習者は、身近にあるものを示す語彙はイメー

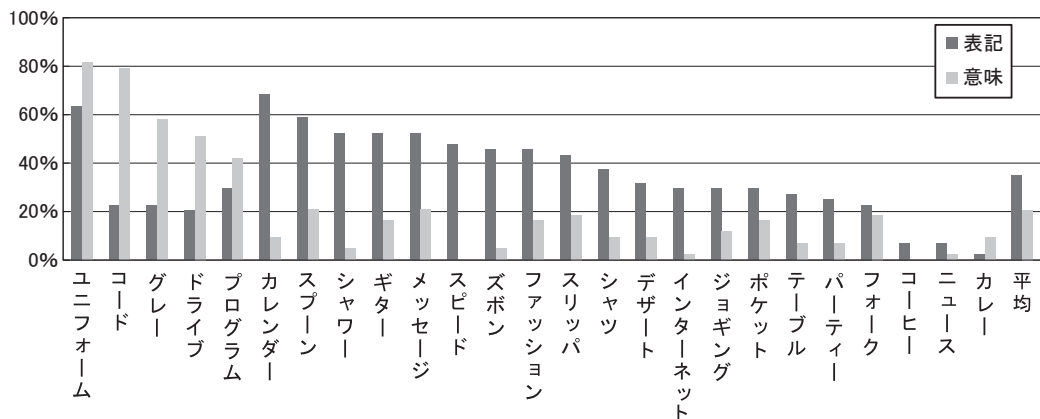


図2 語別の聞き取りのテスト誤答率

ジしやすく習得しやすく、視覚的に示されにくく抽象的なものは習得しにくいと指摘している。

今回の中国語母語話者を対象とした調査でも同様の傾向がみられた。しかし、語に対するなじみといっても、そこにはさまざまな要素が含まれ重層的であり、単に身近で具体的なものは習得しやすともいえない。たとえば、「カレンダー」は日常生活で使用し身近な具体物で示せるものであり意味の理解度は高いが、表記の誤用は多い。これは、身近にある具体物であっても、表記を見るあるいは、実際に書く機会が少ないことに起因していると考えられる。抽象的な語であっても、「インターネット」などは正解率が高い。授業だけでなく、普段の生活で文字や音声にどの程度さらされているかということが影響するといえるのではないか。

以上のように、語によって表記と意味の正答率にずれがあり、カタカナ語は難しいといっても、その「難しさ」には違いがみられる。結果として、全体的に難しい印象の増幅につながっていると思われる。

「グレー」「コード」「ドライブ」など表記は正確であるが意味は分からない語は、問題があるものの、聞き取れれば後で辞書等によって調べることができる。一方、意味は分かるが正しく書けない語が多くみられたが、これは一つには本調査のテスト語彙は主に日本語能力試験N4程度の初級レベルであるためであろう。カタカナは表音文字であるため、意味を理解するだけでなく正確に音を聞き取り表記できることも重要である。やさしい語すら正しい表記ができないのでは、今後レベルが上がると、意味も分からず書けないという語が増加し、難しさを感じる事が予想される。全ての語を書けるようになる必要があるわけではなく、カタカナ語の指導考える際には、受容語彙と産出語彙を選別して整理する必要がある。

個人別にテスト結果をみると、誤答率5割以上が表記8名、意味1名で表記の誤答率が高い者が多いが、表記と意味ともに正答率が8割のもの6名おり、そのほかは表記と意味の正解

率にずれがみられた。

4.3 カタカナ語に対する意識調査の結果

次に、カタカナ語に対する意識調査の結果について述べる。カタカナ語について感じていることを答えてもらった自由記述をのぞいて、それぞれの問いには「とてもそう思う」から「全くそう思わない」の5段階で答えを求めた。

難しさについては、「カタカナ語は難しい」という問いには「とてもそう思う」「そう思う」あわせて30名(68.2%)であった。「書く」「聞く」「読む」「発音」の技能別の難しさに関しては、「とてもそう思う」「そう思う」あわせて、聞く24名(54.5%)>書く21(47.7%)>読む20名(45.5%)>発音16名(36.4%)であった(図3参照)。カタカナ語に難しさを感じており、特に聞くことに苦手意識を持つ学習者は半数以上いる。自由記述でも「覚えにくいし、聞き取りにくい」「英語で読んだら意味がわかるけど、日本人の独特な発音に転換したカタカナはよくわからない」「正しく書くのが難しい」などのコメントがあった。中国語母語話者にとって、漢字表記できる語は音(読み)を正確に把握していなくても、文脈から意味を類推し正しい漢字を表記することが可能である。一方、カタカナ語は表音文字であり、音を正確に把握していなければ書けないため、難しさが顕著に現れるものと思われる。

以下、カタカナの使用や学習に関する問いについて、「とてもそう思う」「そう思う」と答えたものをあわせて「思う」「全くそう思わない」「そう思わない」を「思わない」としてみていく。「カタカナ語は面白い」は、「思う」7名(15.9%)に対して「思わない」23名(52.3%)である。「日本語でカタカナ語が使われることは好ましい」は「思う」11名(25.0%)、「思わない」19名(43.2%)、「カタカナ語をできるだけ使いたい」^{註2}は「思う」6名(13.6%)、「思わない」24名(54.5%)である(図4参照)。自由記述でも、「日本語で意味を表せる言葉もあるのになぜ外来語を混ぜて話すかまったく分らない」、「英語でもないし日本語でもないし、中途半端な感じがする」など

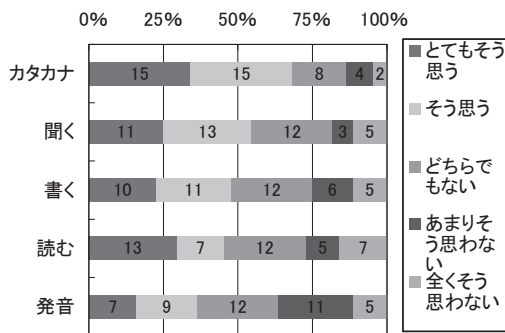


図3 カタカナの難しさ

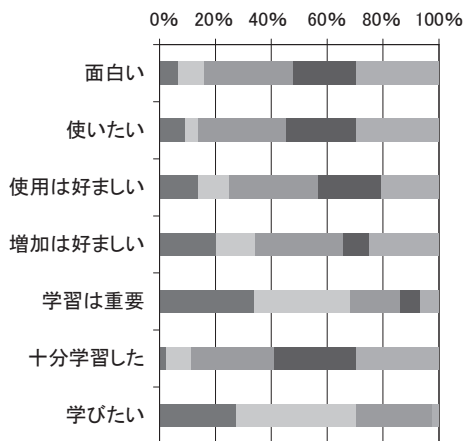


図4 カタカナの使用や学習

カタカナ語に対して否定的な意見がみられた。「自分話す時はあまりカタカナ語使わない。」「発音が難しいので、一般的に他の人と話すのが恐怖感を感じる。(中略)相手に通じない。」など、カタカナ語を使わないという非用と思われるコメントもあった。

陣内(2008)は、中国語母語話者は日本語の中のカタカナ語に対する評価は低いと指摘しており、本調査でも同様の結果がみられた。しかし、「これからも日本語でカタカナ語が増えることは好ましい」という問いに対して、「思う」と回答した人が15名(34.1%)いるのに対し、「思わない」と回答した人も同様に15名いる。また、「日本語は生きているものである。新しい言葉が出たり、古い言葉が使わなくなったりするのが理解できる。」という意見もあり、カタカナ語の増加はある程度容認されていること

がうかがえる。

今回の調査対象者は日本で生活しており、日々カタカナに触れることも多く、その必要性を感じているようである。「日本語を学習する上でカタカナ語は重要である」には30名(68.2%)が「思う」と答えている。一方で、これまでの学習に関して十分であると答えたのは5名(11.4%)である。その結果が、「カタカナ語を教えてほしい」31名(70.5%)と指導に対する高い要望につながったと思われる。自由記述でも、「外来語、カタカナ語ができたときに、その実用性はすごく大きいと思う」、「もし、日本語をマスターするならば、外来語を勉強することは欠かせない。」というコメントがみられた。

4.4 テストと意識調査の結果との比較

聞き取りテストの結果がカタカナに対する意識や学習者の背景と関連性を持つかどうかを探るため、テストと意識調査の結果との相関関係をみた。その結果、発音の難しさと表記、読みの難しさと表記は弱い相関(相関係数 $r=0.36$, $r=0.30$)が、日本語学習歴と表記は弱い負の相関($r=-.37$)がみられた。表記は、発音や読みに難しさを感じるほど誤用が多く、日本語学習が長いほど正確になるようである。一方、英語学習歴は意味理解にのみ弱い負の相関($r=-.35$)がみられた。英語学習歴が長いほど意味の理解度は高いが、必ずしも正確に書けるわけではないといえる。

このように、語の性質だけでなく学習者の意識や背景によっても、表記の正確さと意味の理解にずれがみられた。日本語学習が長くなるに従って、必ずしも意味の理解が進むとはいえないため、例えば、英語の学習経験のある学習者には、カタカナ語の意味の理解において、英語の知識を利用した指導方法が効果的であると思われる。カタカナ語の指導に関しても、個々の学習者に対応した指導の必要性が示唆される。

5. まとめと今後の課題

以上のように、中国語母語話者を対象として、カタカナ語の聞き取りにおける表記と意味の理解の調査を行い困難点を分析した。さらに、意識調査を行い、学習者のカタカナ語に対する意識や背景と聞き取りテストの結果との関連を探った。その結果、語によって表記と意味の正答率にはずれがあり、音を聞いて意味を理解する受容的な知識のある受容語彙ではあっても、正しく表記することができる産出語彙としては定着していない語が多くみられた。また、語の難しさだけでなく、学習者の意識や背景によって、カタカナ語の難しさが異なることも明らかになった。

全ての語を書けるようになる必要があるわけではないため、指導にむけて受容語彙と産出語彙を選別し整理する必要がある。さらに多くの対象者に調査を行い、個々の学習者に合わせた効果的なカタカナ語彙の指導法を検証することを今後の課題としたい。

謝辞：本研究は科研費「韓国語および中国語を母語とする日本語学習者のカタカナ語の習得と意識に関する研究」（基盤研究（C）23520633）の助成を受けたものである。

注

注1 語末の長音などカタカナの表記に関してはゆれもみられるが、ここでは日本語能力試験出題基準での表記を正解とした。

注2 質問紙の問いは「カタカナ語はできるだけ使いたくない」という逆転項目であるので、反転し分析を行った。

参考文献

- 1) 石綿敏雄 (2001) 『外来語の総合的研究』 東京堂出版
- 2) 上野山愛弥 (2010) 「英語圏の学習者にみられる外来語の習得—海外と国内で学ぶ学習者を対象とした調査の結果より—」 『言語と文化』 4号, 17-
- 3) 小熊利江 (2008) 『発話リズムと日本語教育』 風間書房
- 4) 恩塚千代 (2004) 「カタカナ語の表記指導に関する一試案」 『日本語学研究』 第9号, 103-115
- 5) 陣内正敬 (2008) 「日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育」 『言語と文化』 11号, 47-60
- 6) 武田明子 (2002) 「カタカナ語の留学生指導に関する一考察」 『マテシス・ユニウェルサス』 4巻1号, 191-206
- 7) 武部良明 (1980) 「日本語教育におけるカタカナの問題」 『日本語教育』 42号, 1-16
- 8) 戸田貴子 (2003) 「外国人学習者の日本語特殊拍の習得」 『音声研究』 第7巻第2号, 70-83
- 9) 中東靖恵 (1998) 「第二言語学習における日本語外来語表記の実態とその問題点の分析—韓国語およびブラジル・ポルトガル語を母語とする日本語学習者の場合—」 『人間文化論叢』 Vol.1, 65-75
- 10) 中山恵利子・陣内正敬・桐生りか・三宅直子 (2008) 「日本語教育における「カタカナ教育」の扱われ方」 『日本語教育』 138号, 83-91
- 11) 畑ゆかり・山下直子 (2010) 「語彙指導を目指したカタカナ語の誤用に関する分析—留学生に対するディクテーション調査から—」 『香川大学教育実践総合研究』 20号, 25-32
- 12) 畑ゆかり・山下直子 (2011) 「語彙指導を目指したカタカナ語の指導の試み」 『日本文化学報』 48号, 99-115
- 13) 堀切友紀子 (2008) 「日本語学習者の外来語に対する苦手意識と受容態度—英語母語話者の場合—」 『異文化間教育』 28号, 74-86
- 14) 皆川泰代・前川喜久雄・桐谷滋 (2002) 「日本語学習者の長／短母音の同定におけるピッチ型と音節位置の効果」 『音声研究』 第6巻第2号, 88-97
- 15) 山下直子・品川直美 (2009) 「講義理解のためのストラテジーに対する留学生の認識—学部留学生への縦断的調査から—」 『言語文化と日本語教育』 第37号, 1-10
- 16) Nation I.S.P. (2001) *Learning vocabulary in another language*, Cambridge University Press